

# NUDの西洋医療と漢方医療

富山医科薬科大学 和漢薬研究所 和漢薬製剤開発部門 谿 忠人

図1 病理病態を解析抑制する西洋医療と抗病力を調整する漢方医療の眼

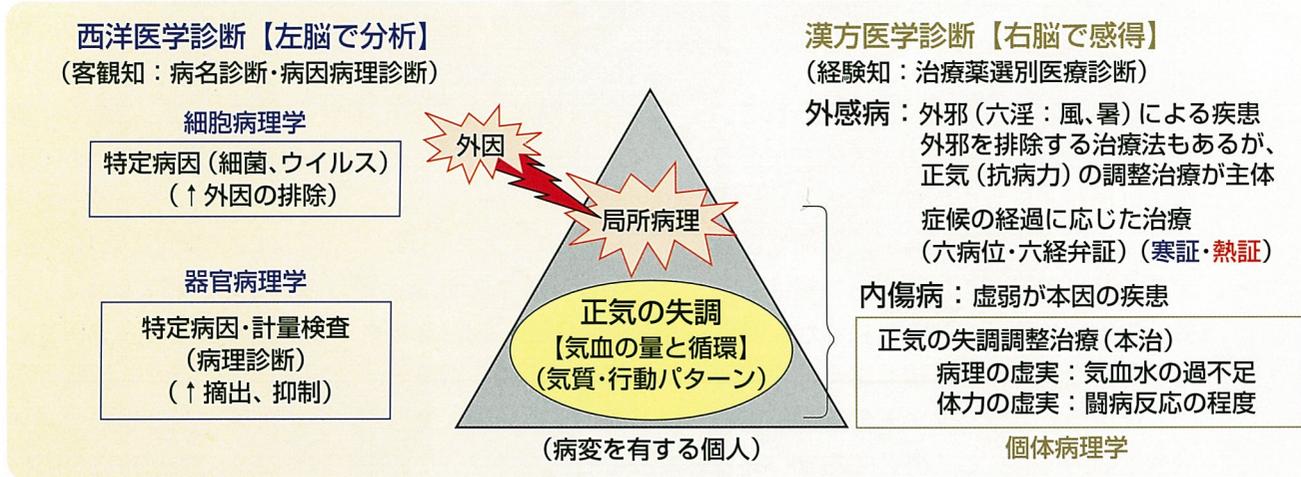


図2 西洋医療の得意領域と漢方医療の汎用領域

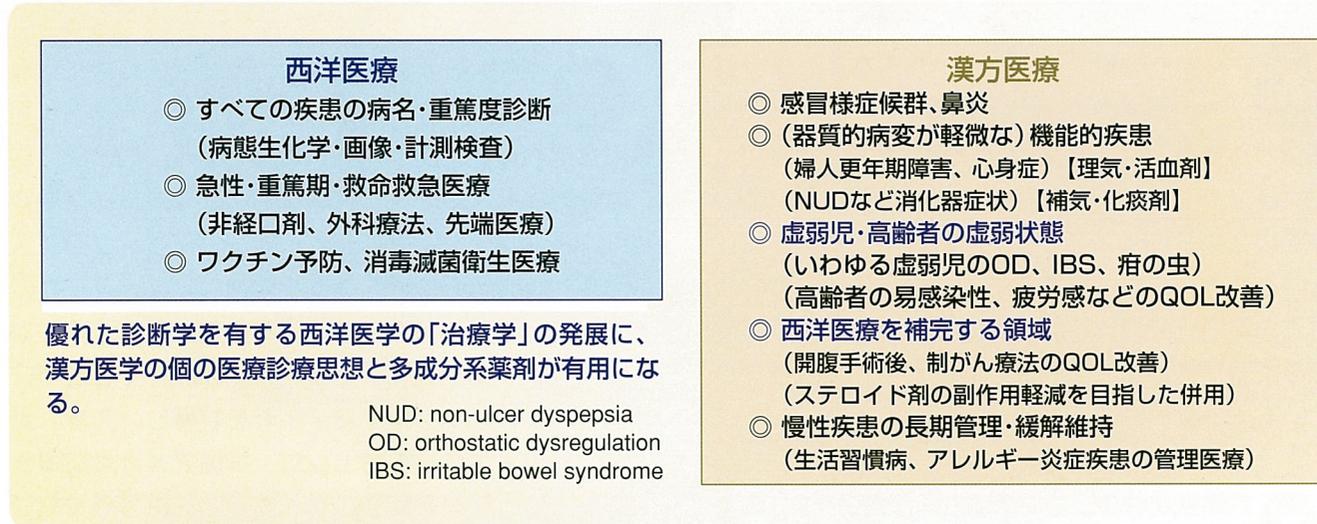
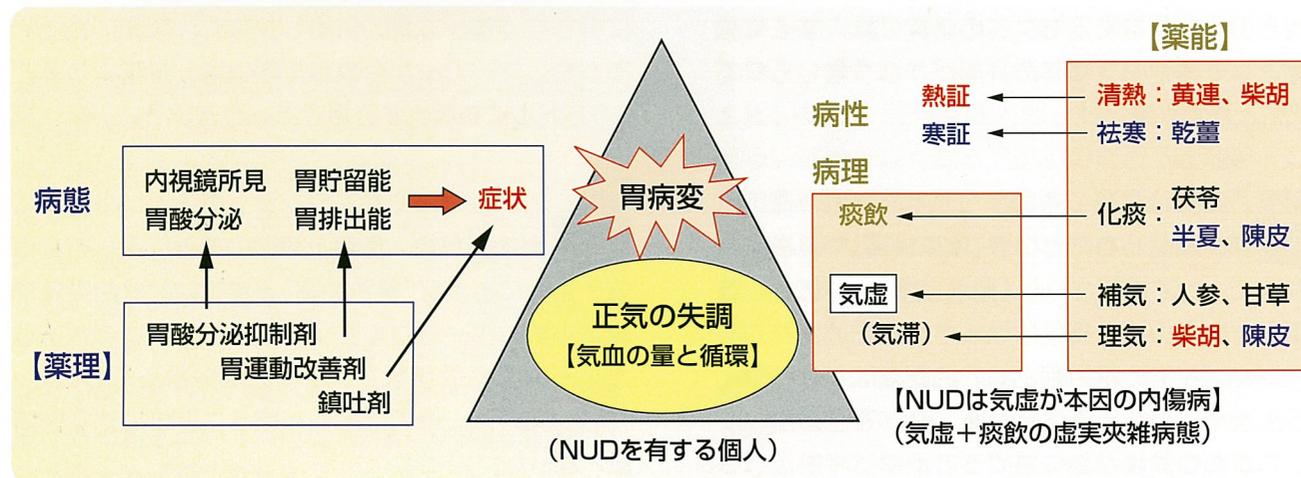


図3 NUDを治療する西洋医薬学の薬理と漢方医薬学の薬能



## 1. 西洋医療と中国伝統医療（漢方医療）の診断と治療(図1)

「一」と「二」の理念：西洋医学は分析し正しい「一つ」の回答を求めます。漢方医療は相対的かつ未分化な「二つ」の陰陽で全体を調整する理念の上に成り立っています。

**感染症と西洋医学：**西洋医学は細菌感染症の治療に優れています。顕微鏡の発見とVirchowの細胞病理学の成果です。病原菌が同じであれば多くの集団に同じ抗菌剤を投与します。

**感染症の予防：**ウイルス感染症に対するワクチン療法は西洋医学の優れた予防治療です。

**西洋医学の計量検査：**西洋医学は優れた病理形態学や病態生化学的検査を有しています。漢方医学の五感検査の発展型です。

**器官単位の西洋医学診断：**要素還元型の西洋医学の底流には人間機械論があり器官毎の病名が診断されます。この病名は薬価収載薬剤の使用基準であり、漢方保険診療においても無視することはできません。

**余 談** 人の生命や心理が研究されていますが、医療科学に限定するべきです。産み分けや心理の純粋科学の「進歩」が、人類の福祉の「退歩」にならないように願っています。この意味で五臓に精神(魂魄)があるとする素朴な漢方医療体系に安心感があります。

## 2. 西洋医療と中国伝統医療（漢方医療）の得意領域(図2)

**西洋医学医療：**西洋医学は重篤急性期の抗菌剤・ステロイド医療(ときに非経口投与)、外科的手術の必要な疾患や救命救急医療、ワクチン予防医療に適しています。これらの西洋医学を踏まえて使用するのが日本の漢方保険医療です。

**東西医学融合：**外科手術後の虚弱状態に用いる補中益気湯や十全大補湯、および術後の腹痛を改善する大建中湯は東西医薬学の融合医療として高く評価されています。術後の状態が漢方医学の虚証(気虚・血虚)です。

## 3. NUDの病理と西洋医薬学の薬理と漢方医薬学の薬能(図3)

**病名診断：**上腹部不定愁訴(NUD)の病理は胃酸分泌や胃粘膜の「びらん」の程度および胃運動能の低下と解析されています。

**局所病理を薬理で抑制：**この局所の病理に対応した胃酸分泌抑制剤や胃運動改善剤など薬理作用を有する薬剤が投与されます。

**全身状態の調整：**なお西洋医学においてもNUDが精神症状などに基づく全身性の症候群として向精神薬なども投薬されます。

### 漢方医学の外感病

漢方医学でも体外から侵入する外邪(六淫)を想定していました。感冒の一般名である風邪は風の邪のことで、この風邪を除く薬能は消風散の処方名になっています。

外感病の治療でも正気の虚を整える生薬を邪気を排除する生薬に配合します。

### 漢方医学の内傷

正気の機能と量の不足病(虚)に由来する疾患群です。虚弱児、高齢者の諸症状が内傷に相当します。虚を有する個体は外邪の侵入を受けやすいと考えられています。

### 心身一如の漢方医学診断

漢方医療は患者の心身を全体視する医療です。臓腑にも精神機能を司ると考えていました。これは現代の自律神経失調症の治療に有用です。

### 漢方医療

器質的病変の軽度な疾患や機能的疾患(不定愁訴症候群)、慢性疾患の食欲不振や疲労感などの管理医療に有効です。

正気(自然治癒力)の虚証に由来する症候群を補益する医療は現代でも有用です。現代の虚証として術後の諸症状や高齢者の虚弱状態があります。

### NUDの漢方病理

胃の運動不全を主とするNUDは漢方病理の気虚に相当します。全身の疲労感や冷え症は寒証です。この気虚と寒証の認められる病態は日本漢方の「陰虚証」です。不安感などは気滞と弁証します。

### 薬能で生薬を選ぶ

気虚には人参、甘草などの補気薬を、気滞には柴胡、陳皮、枳実などの理気薬を、嘔気などの痰飲には半夏、陳皮などの化痰薬を用います。

症候の病性に応じて寒証には青字の生薬、熱証には赤字の生薬を使います。

図4 NUDの診断(西洋医学病名診断と漢方医学の医療診断)

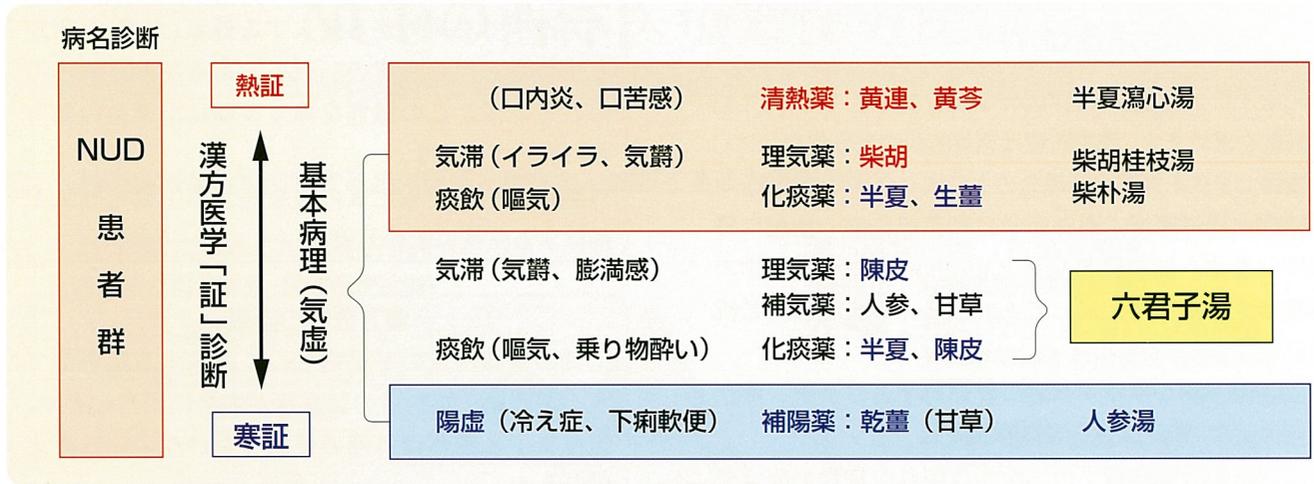


図5 胃炎とNUDの経過診断と治療

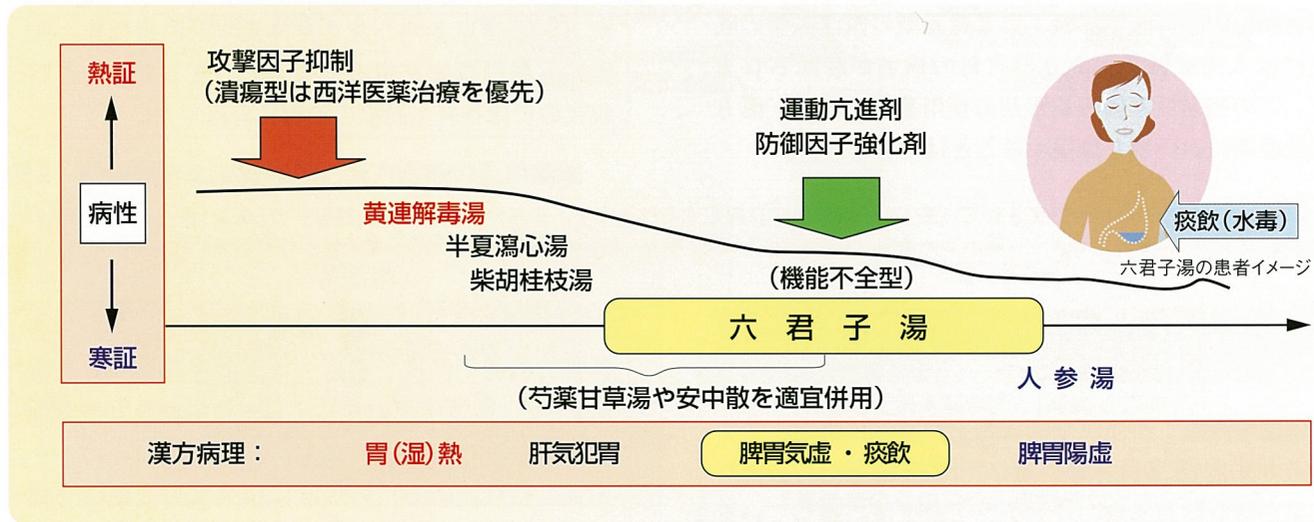


図6 六君子湯の客観知(薬理)と経験知(証と薬能)

**運動不全型上腹部愁訴に対する六君子湯の薬理**

- 胃排出能改善作用
- 胃貯留能改善作用
- 消化性潰瘍予防作用
- 消化管粘膜修復促進作用

**六君子湯および配剤生薬の薬能**  
(薬能：和胃降逆、補気)

疲労倦怠感、胃腸虚弱

脾胃気虚←補気 { 人参、甘草、茯苓、白朮

上腹部停滞感、嘔気、乗り物酔い

脾胃痰飲←化痰：半夏、生薑、陳皮

脾胃気滞←理気(降逆)：陳皮 (四逆散と併用する)

**六君子湯証(漢方医学的投与指針)**

1. 経過診断(少陽から太陰病期に相当)

熱  
寒

→経過

(亜急性~慢性期)

2. 日本漢方の体力病性診断

寒証 ← 反応性の実証 (柴胡桂枝湯) → 熱証

六君子湯

人參湯 ← 反応性の虚証

が六君子湯を「比較的体力の低下した人」に用いる口訣のイメージです。

3方剤の適応者は相互に重なります(いずれを用いても改善する病態があります)。

## 4. NUDの病名診断と漢方医学の「証」診断(図4)

**経緯診断：**西洋医学の病名診断を縦(経)とし、この患者群を漢方医学的に横(緯)に亜群として再分類し治療薬を選別することを経緯診断と言います。

**同病異治：**図4では西洋医学的にNUDと病名診断した患者群を漢方医学的な病理観で再分類し5種類の漢方製剤で治療する同病異治の例を示しています。

**NUDの病名漢方：**NUDに六君子湯と1:1の対応で決めるのではなく、NUDの病型の中で「運動不全型」のNUDに六君子湯が適すると考えれば同病異治の考えに近づきます。

## 5. 胃炎とNUDの経過診断と治療薬物の選定(図5)

**病態の経過：**胃炎は臨床症候的に急性胃炎(急性胃粘膜病変)と慢性胃炎に分類されます。前者は内視鏡所見に応じて胃酸分泌を抑える攻撃因子抑制剤が用いられます。これは西洋医学の得意領域です。

**慢性胃炎：**慢性胃炎は臨床症候的に a) 胃食道逆流型、b) 潰瘍型、c) 機能不全型(運動不全型)に分類されます。a) と b) には急性胃炎と同様の攻撃因子抑制剤が用いられ、c) には消化管運動亢進剤が用いられます。

## 6. 六君子湯の薬理と薬能(図6)

**薬理：**薬理は実験科学で解明されつつある作用および作用機序のことです。西洋医学的には薬理が薬剤を用いる根拠です。六君子湯の薬効薬理も整備されてきました。

**薬能も併用：**漢方製剤の場合には薬理研究が充分ではないので暫定的に薬能を参考にします。

なお薬理には実験的な根拠がありますが、薬能は伝統医療の「理論(約束)」ですから情報の質が異なります。

中医学の弁証論治：(症候群を診察)⇒(病理の想定)⇔(薬能を有する生薬を選定)  
日本漢方の方証相対：(症候群を診察)⇒(経過・病性・反応性の虚実)⇔(方剤を選定)

### 中医学の六君子湯証

図6の左下の図は六君子湯の中薬学的解説です。すなわち、(症候群)から①病理を想定し②これを調整する薬能を有する生薬を組み合わせて治療します。これは西洋医学の薬物治療学と同様の考え方です(但し薬能と薬理の相違があります)。

### NUDの基本は脾胃気虚

NUDの基本症候(食欲不振、胃腸虚弱、疲労倦怠感など)は気虚(脾胃気虚)の病理に相当します。これは人参、甘草、茯苓などを用いる指針です。

### 気虚に伴う痰飲

NUDの嘔気、食後の停滞感、膨満感などは痰飲や気滞の病理に相当します。痰飲は半夏、生薑、気滞は陳皮を用いる指針です。

### NUDの主方は六君子湯

上記の生薬群を配合したのが六君子湯りっくんしとうです。これより熱証傾向であれば柴胡桂枝湯、寒証には人参湯と考えるとよいでしょう。

### 経過と病性

経過に応じて病理や病性も変動します(証の変化)。胃炎の急性期や慢性胃炎(NUD)の胃食道逆流型や潰瘍型(口内炎や上腹痛の顕著な場合)は熱証として柴胡、黄芩、黄連などの清熱薬を含む方剤を用います(図5では上方は熱証)。

冷え症や下痢軟便が顕著な場合を寒証と考え、甘草と乾薑の組み合わせ(薬対)や、人参や茯苓、朮の多い方剤を用います

### 薬能

薬能は中国伝統医学で経験的に約束された作用のことです。現代中医学の弁証論治は気血の失調(虚実)を生薬の薬能で調整する理論の上に成り立っています。

### 生薬の複数の薬能

生薬の薬能は単一ではありません。気虚を調整する補気薬は病態の燥証(体液不足)と湿証(水滯や痰飲)に応じて使い分けます。

気虚証 { 燥証 ← 人参、甘草、山薬  
湿証(痰飲) ← 茯苓、白朮

### 日本漢方の六君子湯証

日本漢方では①慢性の胃腸症状に用いるという経過診断、②冷え症傾向に用いる寒証(陰証)診断、③疲労感のある体力の低下した人に用いるという虚証という診断(腹診や脈診)、そして④上腹部停滞感や嘔気という特殊症候から六君子湯証と診断します。

診断(病性・病理)に対応した生薬の用薬規範(薬性・薬能)を学ぶのが漢方薬学の課題です。